



最終回

麒麟か反逆者か「明智光秀」

講談師 一龍齋貞花

大河ドラマが、我がまちゆかりと決まると、推進協議会を設立、ロゴマーク作成、土産品開発。光秀ゆかりの岐阜市、可児市、恵那市の3ヶ所に「大河ドラマ館」を建てるなど、経済効果73億円と試算され、すべり出しは順調だったが、新型コロナウィルスで外出自粛とあつて致し方なし。「岐阜関ヶ原古戦場記念館」鉄筋コンクリート造5階建て、古戦場巡りの拠点となる施設で、オープンは7月17日の予定とのことだが、どうなりますことが。

天正十年六月二日の朝まだき、

「敵は本能寺にあり」

明智光秀の号令のもと、一万三千余騎の軍勢、本能寺を十重二十重に取囲み、どつとばかりに闇の声を上げました。信長が床に入つて半刻、正に寝入りばな、闇

の声にガバと起き上るや、

「ハテ、心得ぬおびただしき音、蘭丸は居らぬか、物見せい！」

次の間に寝ておりました蘭丸、

「ハッ、かしこまつて候」と、

ツカツカと立出で、欄干に片足を掛け、十文字の槍にすがつて伸び上がり小手をかざして眺むれば、早や白々と明ける霧の絶え間に、水色に桔梗の紋打つたる大旗。

「南無三、惟任だ……。申し上げます、

惟任叛逆にござります」

「ナニッ、日向か。ウ、ウーム」

天下無敵の豪将も思わづうなつた。当代無双の軍学者諸葛孔明の再来と呼ばれたる光秀が謀叛とあつては、わずか百人余りの人数ではどうすることも出来ません。打ち破られるは言うまでもなく、逃げることさえ出来るものでない。

「ここはいかにしても我等が防ぎますれば、一刻も早くご退去を」

「愚かなことよ、日向めでは是非もない。なまじ逃れんとして雑兵葉武者の手にかかるは末代までの恥辱。この場に於いて潔く自害に及ぶであろう。皆の者覚悟いたせ」

かくする間もあればこそ明智の軍勢どつとばかりに踏み込んで参りました。

「ソレツ 者共」

「ハハッ」

信長の下知に森蘭丸、弟坊丸、力丸、高橋虎松、小河愛平等近習数十人、得物得物を引つ提げ命知らずに切り結ぶ。信長は白練の帷子のまま重藤の弓を小脇に掻い込み、

「おのれ逆賊日向め、織田右大臣信長

これにあり 者共覚悟致せ！」

弓取り直し、ヒヨウヒヨウと散々に射かけます。鋭き矢先にさしもの明智勢ひるんだかと思えたる時、

「安田作兵衛国次、見参！」

剛槍しごいて信長に一番槍。

「匹夫、覚悟」

信長のヒヨウと放つた矢、「心得たり」と作兵衛、槍で払い落とそうとしたが、槍と矢がすれ違いズブリと左の腕に突き立った。

「何んのこれしき」

豪勇作兵衛、矢を突き立てたまま信長目掛けて突きかかるうとする。

「小しやくなりい」

二の矢を放とうとするや武運尽きたか、弓弦ブツリ切れた。寄せくる敵を防いでおりました蘭丸、すわや一大事と駆け寄り、



「殿、この敵は手前が引き受けますれば、お心静かにご生害を」

「オ、よくぞ申した」
蘭丸が死をもつて敵を防いでおります間に、奥の間と入りました信長。

燃え盛る炎の中に、四十九歳を一期として切腹して合い果てました。

本能寺よりおよそ一キロの妙覚寺におりました嫡男信忠、スワヤ父の一大事と二百の手勢を率いて本能寺へ向うも大勢の明智軍に行く手をはばまれ近くの二条城へ。だが多勢に無勢、信忠も奥の間に入り自刃して果てました。

信忠がここを逃げのびたなら織田家の跡継ぎになったに違いありませんが、オロオロしていた二人の弟と違って勇猛な信忠、二条城で籠城しようと考えたため討たれてしまい。こうして信長、信忠を討ち倒した光秀でしたが、父子の遺体は炎の中に焼けてしまい、これが大きな誤算。天下に号令をかけるには信長、信忠親子が確実に死んだことを示す必要がある。

中国の探題として毛利と戦っておりました羽柴筑前守秀吉は、主君信長の悲報を知るや、ただちに毛利と和議を結び、信長の遺体の無いことをつかみ、持てる金総て将兵に与え、

「信長公は、生きておられるぞ」と中国大返し。

信長の亡骸は不明とされていますが、この時供をしておりました原志摩守宗安が、本因坊日海上人の指示によって、信長の首を持ち出し富士山の麓、富士宮市芝川町西山本門寺の境内に葬ったといわれ、信長公の首塚が建てられ、十一月の第二土曜日信長公黄葉まつりが行われています。信長は切腹の時、「我が亡骸を富士の裾野に葬れ」と、遺言したという説もあります。

女城主直虎ゆかりの井伊家の菩提寺浜松の龍潭寺四世悦岫和尚は信長の子で、形見の遺品岷山天目茶碗を贈られています。

光秀は、安土城を焼き払い、織田の残党を掃討する一方、毛利、上杉、北条、長宗我部ら諸大名に書状を送り味方に付けようとした。

信長が討たれたと聞くや細川藤孝は出家、光秀に味方しない態度を表明。光秀は「出家は頭に来たが今からでもいいから味方してほしい」と七日後手紙を。そして天下人と認めてもらおうと朝廷に銀五百枚。京都五山、大徳寺に各百枚送っています。

ところがまさかと思つた秀吉の大返し、秀吉は鎧兜、武器を船で尼ヶ崎へ。兵を身軽で夜も走らせ当時一日五里の行軍を二十里走らせ、光秀こられる筈がないと机の上で計算したんでしょう。物見を出しておかなかつたのか。

「エッ、もう来ちゃつたの」

あわてて六月八日筒井順慶に使者を派遣、順慶は洞ヶ峠まで出陣したものの状勢を眺め秀吉に味方。洞ヶ峠の順慶です。味方についてくれると思つた娘婿の細川忠興をはじめ、組下の池田恒興、高山右近、中川瀬兵衛ら、六月十三日天下分け目の天王山山崎の戦いに、「主君の弔い合戦じゃ」という秀吉の下に馳せ参じ、戦いに敗れた光秀は坂本さして落ちて行く途中、小栗栖に於いて落武者狩りの土民の手にかかり五十五歳をもつてあえない最期。わずか十一日間の天下でしかありませんでした。

夫光秀が敗れたと知るや、熙子は坂本城の金庫倉庫を開き、生き残つた家臣に総てを分配して城を退去させると、自害して夫の後を追いました。四十六歳。戦乱を駆け抜けたおしどり夫婦でありました。

かくしてライバル秀吉が天下取りに立ち上り、柴田勝家は越前にあつて光秀の

動向つかめず仇討ちの手柄を奪われたばかりか、賤ヶ嶽で秀吉に敗北。

たとえ幾日でも天下人となれば助力する武将がありそうなものですが、光秀ほどの優秀な人物に、娘婿や組下の者が何故味方しなかつたのか。秀吉の巧みな根回しだけでなく、光秀に人望が無かつたのではないか。

官僚的と嫌われた石田三成にでさえ、敗れること覚悟で三成に味方して切腹した大谷刑部のような友人がいたんです。

光秀は落ち延び天海僧正となつたという伝説も、源義経がジンギスカンになつたというのと同じで、強烈な天下人信長に反逆したという大ききさからかもしれません。

明智家の菩提寺大津の西教寺に、光秀、熙子をはじめ一族のお墓があり、可児市の天童寺に高さ六尺一寸三分という日本一の位牌が祀られ、毎年六月十三日法要が営まれています。

中途採用者から大出世、そして反逆と人の人生は正に有為転変と申せましょう。エリートといわれた人の中に同様の人生を送つた方もあるのではないのでしょうか。明智光秀から生き方を得るものがあるかもしれません。